

《第 532 回(2026 年 2 月 12 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:10 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『リトル・トリー』 フォレスト・カーター/著, 和田 穹男/訳, 藤川 秀之/挿画 めるくまーる

2月の課題図書は、『リトル・トリー』でした。5才で両親を亡くした男の子が、チェロキー族である祖父母に引き取られるところから始まる物語です。「リトル・トリー」という名をもらい、山の中でインディアンとしての生き方を身に着けていきます。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

※今回の感想では、ネイティブ・アメリカンではなく、課題図書本文にあるインディアンという呼び方を使用しました。

●「涙の旅路」で多くの人が亡くなっている。今まで具体的なことを知らなかった。男の子がおじいちゃん、おばあちゃんと幸せに暮らして終わる話ではない。孤児院でニレの木の声が聞こえたことに救われた。インディアンについて学んでいきたい。

●いい言葉がたくさんあった。お互いに理解する努力、知ろうとすることが大切。白人至上主義がつかった。尊重する心を持たずに最新の技術を持つと悪いことに使うのがおち、というワインさんの言葉。今の人たちによく考えて欲しいと思った。

●ふっとしたときに思い出す特別な本。おじいちゃん、おばあちゃんの亡くなり方が心残り。日本にいと、一神教は理解しがたい。自分と違う考え方の人を批判する。無知は恐ろしい。子どもたちにも本などを使って自分で情報を得るようになって欲しい。

●おじいちゃん、おばあちゃんのトリーへの教えがすごい。白人は自分たちの考えを押し付けて、同化させようとする。救いは、トリーのまわりの大人がすばらしいこと。移民問題を抱える若い人たちに読んで欲しい。今の時代とリンクするものがある。

●小説ではあるが事実が含まれていて、心に迫るものがあった。著者には長生きしてインディアンの話を書いて欲しかった。誰もがボディー・マインドとスピリット・マインドを持っている。日本には八百万の神がいて、インディアンの教えが理解しやすい。

●チェロキー族の一代記のように読んだ。自然のあり様に謙虚で、いい言葉がたくさんあった。生きていくことは難しく、精神は自分で守るもの。孤児院ではトリーが一人の人間として認められず、理不尽だと思った。すがすがしさもあり、読後感はやかった。

●人が豊かに生きること、幸せとはどういうことかを考えながら読んだ。人間は自然の中で生きる自然の中の一員。地球に対して傲慢なことをしている。もっと謙虚になる必要がある。理不尽なことが起きるのは嫌だけど、人間の歴史の中で繰り返されている。

●いい本に出合った。人間はどうして死んでいくのに、生きていくんだろう。一番怖いのは死。でも、この世の中だけで死んでいくのではなく、永遠に続くのが命。その命の大切さを伝えていくのが人間の仕事。大きなものから命を預かっている。

●以前にも読んでいたが、本は読む時期、年齢によって感想が違う。子どもの意思を尊重するおじいちゃん、汚い言葉を嫌うおばあちゃんの関係がよい。教育は教えるだけでなく、関係性が大切。愛と理解が必要。時間をかけて理解していく必要がある。

●インディアンとして、山や動物を必要以上に傷つけずに生きる姿は見習うべき。おじいちゃんもおばあちゃんも「次に生まれてくるときは、もっとよくなる。」と言い残していくところが印象的。世の中いいたことばかりではないが、次はもっとよくなるはず。

次回 3月12日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『ものぐさトミー』 ペーン・デュボア/文・絵, 松岡 享子/訳 岩波書店

※申込み・参加費は不要です。